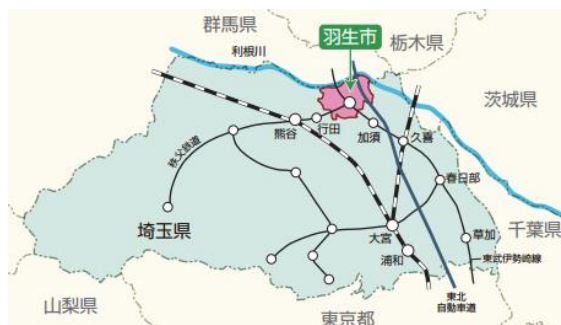


# 1 羽生市の概観

**1 位置** 羽生市は関東地方のほぼ中央、埼玉県の北東部に位置し、東京へ60 km、さいたま市（浦和区）へ40 kmの距離にある。

市域は東西 10.25km 南北 6.71km、面積 58.64 km<sup>2</sup>である。



市の北部は利根川を挟んで群馬県に接し、東部及び南部は加須市に、西部は行田市に接している。

東武伊勢崎線は市の中央西寄りの地区をほぼ南北に走り、東京都浅草駅までは約80分、また、JR久喜駅を経由して大宮駅へ約40分、東京駅へ約80分で結ばれている。秩父鉄道は羽生駅を起点とし、熊谷駅でJR高崎線に連絡している。

道路は、市の西部を国道122号が南北に通り、市の南部を国道125号バイパスが東西に通っている。

平成4年には東北自動車道に羽生インターチェンジが開設され、東京・宇都宮方面の各都市へ短時間で結ばれた。これらの幹線道を中心に県道及び市道がネットワークされている。

市の中心部は商工業の市街地となっており、衣料の町として発展し、周囲は農業地帯で肥沃な田園に恵まれている。

<b>位置</b>	東経東	139度35分	西	139度29分	
	北緯南	36度08分	北	36度11分	
<b>周囲</b>	36 km				
<b>面積</b>	58.64 km <sup>2</sup>				
<b>広ぼう</b>	東西	10.25 km			
	南北	6.71 km			
<b>海抜</b>	最高	28.2m	最低	15m	
	<b>隣接市町</b>	東	加須市	西	行田市
		南	加須市	北	群馬県邑楽郡明和町

**2 地形** 古くから利根川の乱流の最も甚だしい地帯で、自然堤防、河畔砂丘が存在し、一様な平坦でなく、高い部分を畑・宅地に使い、湿地を水田等に利用してきた。会の川流域は、川俣、新郷、岩瀬、須影の河畔砂丘が存在していた。

しかし、昭和30年代より土地改良事業、区画整理事業により整備され、県北の穀倉地帯・居住地として用水路、排水路が縦横に走り、往還地が良い地形をなしている。

**3 地盤高** 羽生市で最も高い地域は、北西隅の昭和橋付近の利根川沿いで基準面上標高28.2m（基準面とは東京湾中等潮位上の高さ）である。最も低いのは三田ヶ谷、手子林の加須市境の地区 15mで、その差は 13.2mである。羽生市の東側の地域は中央に低い皿状の西半分の形をなしていて、北部の利根川沿いと、東西の会の川沿いを円とするいびつな同心皿状の地形である。市街地はやや西に位置して、二つの皿の傾斜のほぼ中程にあり、標高 14m～15mの地盤の上に造られている。

**4 気象** 関東地方のほぼ中央にある羽生市は、内陸型気候に属し、夏は蒸し暑く、冬は、からっ風といわれる強い季節風が吹く。梅雨期は南東の季節風によって多雨量となる。

**5 動植物** 自然堤防、河畔砂丘、低湿地に以前は野生動植物が多く見受けられたが、宅地開発や土地改良等により、山林原野、池沼が減少し、動植物の生息地が奪われるなど、その種類及び数は極めて少なくなっている。

特に、水草や水生植物は、農薬の使用によって学術上世界的に貴重なものでさえその難を免れない状況にあったが、現在その保護、増殖に努めている。

・国指定天然記念物	宝蔵寺沼ムジナモ自生地	三田ヶ谷
・県指定	〃 勘兵衛マツ	上新郷
・県指定	〃 中川低地の河畔砂丘群 桑崎砂丘	桑崎
・市指定	〃 永明寺のイチョウ	下村君
・市指定	〃 上岩瀬のシイノキ	上岩瀬
・市指定	〃 上新郷のシイノキ	上新郷

**6 水資源** 西南に向い、会の川が流下し、北部より東南部に葛西用水路が貫流する。北部は県境を貫流する利根川にして、利根大堰の新設に伴い、埼玉用水路を経て各幹線用水路に導入する。なお、各排水路は西部により東部に向い流下し、幹線排水路の中川に流入する。

## 7 羽生市の沿革

・明治22年4月1日 町村制施行により、32村が合併し、羽生町、新郷村、須影村、岩瀬村、川俣村、井泉村、手子林村、中島村の1町7村となる。

・昭和29年9月1日 羽生町外6村が解体合併し、県下16番目、全国434番目の市として羽生市が誕生。

世帯数 6,604戸

人口 36,564人

面積 44.59km<sup>2</sup>

・昭和30年1月1日 三田ヶ谷村、村君村の解体合併により、千代田村となる。

世帯数 1,084戸

人口 6,559人

面積 14.48km<sup>2</sup> (昭和30年国勢調査)

・昭和34年4月1日 千代田村が羽生市に編入合併。

世帯数 7,892戸

人口 44,092人

面積 59.20km<sup>2</sup>

58.55km<sup>2</sup> (国土地理院による面積修正)

58.64km<sup>2</sup> (平成27年4月1日国土地理院による面積修正)

**8 農業** 農業は水田を中心とした稲作が中心であり、農家数・人口・経営耕地面積とも減少傾向にある。

農業経営体数は759経営体で、経営耕地面積は165,557aである。

販売農家数は750戸で、自給的農家数は562戸となっている。主な産物は、米・小麦の主穀物、キュウリ・いちごなどの野菜である。

**9 工業** 江戸時代末期以降、青縞の生産地であったが、大正時代以降、被服・足袋生産にかわり、電気裁断機等の導入により学生服が大量に生産された。第2次世界大戦中は全工場が軍需被服工場に転換され、工場規模も膨張した。

昭和26年衣料統制が解除になり、被服不足を機に衣料産業は急速に発展した。また、被服産業以外においても、機械器具等をはじめ各種諸工業も発展した。そして、首都圏という立地条件を生かして、高度成長期以降、大沼・小松台工業団地、川崎産業団地、上岩瀬産業団地の造成により企業誘致が行われ、現在、市内には多種多様な産業が集積している。

**10 商業** 市街地部分へ自然発生的に集積した店舗により、7つの商店街が形成され現在に至っている。中央地区商店街の活性化を図るため、羽生市民プラザを中心とした各種イベントにより賑わいづくりが創出されている。

一方、市内の商店では経営者の高齢化や後継者不足といった問題に直面しており、空き店舗の解消、事業の継承が課題となっている。

また、平成19年と令和2年には市の南部に大型商業施設が誕生し、近隣県を含めた商圈の中心を担っている。

さらに、羽生市と関係団体が協働し、商店街とその周辺の魅力創出のための活動を行っている。

## 11 羽生市の地名

江戸時代、羽生町場を中心に84ヶ村で羽生領を形成していたことが、「新編武蔵風土記稿」に記されている。当時、羽生は「羽生・埴生・羽丹生」の文字が使われていたようである。葦塚一三朗著「埼玉県地名誌」によると、ハニウの名は、定義的には「埴生」と書くべきで、埴（ハニ）には、粘土、赤土の意があり、羽生の生（ウ）には村の定義があるから、羽生には粘土・赤土を産する村の意に解される。また、羽生・埴生の地名は全国に多く、千葉県成田市の埴生郡、新潟県南蒲原村の羽生田、京都府船井郡園部町の埴生、福岡県中間市の埴生郷等がある。

これらの市町村は、それぞれ「埴生」を埴輪の産地として解している。よって、羽生の地名も埴輪の産地から起こったとも考えられる。

市内の各地に古墳の数も多く埴輪等も出土しているが、埴輪の窯跡はいまだ一つも発見されていない。

## 12 気象概況（熊谷地方気象台における値）

### (1)2022年の値

【単位：気温℃、降水量mm、日数（日）】

項目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
平均気温	3.9	4.3	10.3	15.2	18.8	23.4	27.8	27.7	24.2	16.8	13.3	6.3	16.0
最高気温の平均	9.3	10.4	16.5	20.7	24.4	28.8	33.0	32.6	28.8	21.5	18.6	12.2	21.4
最低気温の平均	-0.7	-0.9	5.0	10.1	13.8	19.1	24.1	23.9	20.6	12.5	8.8	1.4	11.5
最高気温の極値	14.9	16.4	25.7	29.1	33.8	39.5	40.0	38.9	33.7	30.4	23.3	18.8	40.0
最低気温の極値	-4.2	-3.3	0.0	1.0	7.6	14.6	21.3	19.1	16.0	5.8	4.8	-3.2	-4.2
降水量	3.0	31.0	52.5	134.0	102.5	105.5	339.0	56.0	267.5	79.0	54.0	27.0	1251.0
雨天日数(降水量≥0.5mm)	1	5	5	13	11	13	11	14	14	12	8	3	110
雪日数	3	5	2	0)	0)	0)	0)	0)	0)	0)	0	2	12
雷日数	0)	0]	0)	0)	5)	7	11	11)	7	1)	0)	0)	42]

#### ※記号の説明

「)」:統計を行う対象資料が許容範囲で欠けているが、上位の統計を用いる際は一部の例外を除いて正常値(資料が欠けていない)と同等に扱う(準正常値)。必要な資料数は、要素または現象、統計方法により若干異なるが、全体数の80%を基準とする。

「]」:統計を行う対象資料が許容範囲を超えて欠けている(資料不足値)。値そのものを信用することはできず、通常は上位の統計に用いないが、極値、合計、度数等の統計ではその値以上(以下)であることが確実である、といった性質を利用して統計に利用できる場合がある。

「×」:欠測の場合、または欠測のために合計値や平均値等が求められない場合に表示する。

※2019年2月1日より雷の観測は、気象レーダーによる観測と雷監視システムによる観測に基づき、雷を自動判別している。  
 ※雪の年日数は、寒候年(前年8月1日～当年7月31日)の期間の雪日数となっているため、年間の雪日数と合わない場合がある。

### (2) 平年値（統計期間1991～2020年）

項目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
平均気温	4.3	5.1	8.6	13.9	18.8	22.3	26.0	27.1	23.3	17.6	11.7	6.5	15.4
最高気温の平均	9.8	10.8	14.3	19.9	24.6	27.1	30.9	32.3	27.9	22.1	16.8	12.0	20.7
最低気温の平均	-0.4	0.3	3.6	8.6	13.9	18.3	22.3	23.3	19.7	13.7	7.2	1.8	11.0
降水量	36.5	32.3	69.0	90.7	115.1	149.5	169.8	183.3	198.2	177.1	53.5	30.9	1305.8

### (3) 累年極値（統計期間1897～2022年）

(令和4年12月31日現在)

項目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
最高気温の極値	23.0	27.0	26.9	32.7	36.2	39.8	41.1	40.9	39.7	33.8	27.6	26.3	41.1
最低気温の極値	-10.5	-11.6	-8.7	-4.5	0.3	7.8	11.8	13.0	8.4	0.5	-4.0	-9.8	-11.6

資料：熊谷地方気象台

## 13 地目別土地面積

【単位：ha】

(各年1月1日現在)

年	総数	田	畑	宅地	山林	原野	池沼	雑種他	その他
31	5,864.0	1,606.7	1,066.3	1,232.3	19.6	7.1	0.5	209.6	1,721.9
2	5,864.0	1,594.2	1,056.1	1,241.9	18.6	7.1	0.7	216.5	1,728.9
3	5,864.0	1,582.7	1,049.2	1,250.7	18.1	7.1	0.7	224.8	1,730.7
4	5,864.0	1,566.6	1,046.9	1,269.9	18.2	7.1	0.7	225.2	1,729.4
5	5,864.0	1,562.7	1,033.9	1,282.7	18.0	7.1	0.7	232.4	1,726.5

※ 固定資産課税台帳に登録された地積である。

資料：税務課「概要調書」

※ 「雑種地」とは、宅地、田畑、山林、原野、池沼以外の土地で、「その他」とは、河川や道路、非課税地等をいう。